

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 17 日現在

機関番号：12604

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25770211

研究課題名(和文)教科書の縮約版を利用した生徒中心型授業モデル開発のための基礎研究

研究課題名(英文) Investigating the effectiveness of using shortened versions of English high school textbook.

研究代表者

白倉 美里 (Usukura, Misato)

東京学芸大学・教育学部・講師

研究者番号：00567084

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：教科書の本文を間引いて分量を減らした「縮約版」は、複雑な文法事項を含んだ英文や、重複した情報を含む英文を間引き、20語程度以上の長めの英文を分割して2文にすることにより簡単に作成することができる。縮約版は元の教科書本文よりも読みやすいので、従来の訳読中心の授業と比べて、授業中に生徒に英語を使わせる機会をより多く作るための時間を捻出することができる。作成にもそれほど手間がかからないので、授業のツールとして汎用性、有用性が高い。

研究成果の概要(英文)：“Shukuyaku-ban” is a shortened version of high school English textbooks, which is considered to be one of the effective and efficient teaching materials. Teachers can make it by removing sentences with complicated structures or redundant information, or by dividing sentences with more than 20 words into two sentences. Using this type of shortened version will provide more opportunities for students to use English.

研究分野：英語教育

キーワード：高等学校検定教科書 縮約版 中学校英文法 読みやすさ

1. 研究開始当初の背景

第二言語習得のメカニズムは、input, intake, output の三段階に分けて考えることができる。これを授業に当てはめて考えてみると、(1) 教科書の内容を理解し、(2) 教科書の英語を取り込み、(3) そこから構築された中間言語 (= 学習者の頭の中にある発展途上の言語体系) を駆使して言語表現する、という流れになる。(2)と(3)の過程において言語活動の導入は不可欠である。

しかし、訳読式教授法に代表される講義形式の授業では、(1)が終わった時点で授業が終了してしまい、(2)および(3)のステップは発生しない。これでは使える英語は身につかない。Swain(1985)は「アウトプット仮説」の中で、学習者は実際に外国語を使うことにより、現在の自分の能力で表現できることとできないことのギャップに気づき (noticing the gap)、文法規則について意識的に考えるようになり、文法知識の自動化 (automatization) が進むことなどにより、言語習得が促進されると述べている。この点からも、(2)と(3)のステップを授業に取り入れることが重要となる。

教育実践の現場で、(2)や(3)のステップに進むことができない大きな理由として、訳読式教授法による教科書の内容理解に時間がかかりすぎる、教師の中に、言語活動のアイデアが乏しい、という2点が挙げられる。これらの原因を解消するために、金谷、他(2011)では3つの授業モデルが提案されている。3つの授業モデルの中で、「縮約版を利用した二度読みモデル」はもっとも画期的である。「縮約版」とは、教科書の本文を間引いて分量を少なくしたもので、一度に扱う分量を減らす代わりに、授業で扱う箇所については繰り返し学習することで確実な定着をめざしている。つまり、「縮約版」を使うことで、(1)教科書本文の内容理解 (= 訳読) にかかる時間を減らして言語活動のための時間を捻出し、(2)「縮約版」を繰り返し使って様々な言語活動を行うことで学習内容の定着を促すことができる。これは生徒中心型の授業展開に直結する点から、今後、訳読式教授法に代わる授業モデルとして大いに期待される教授法である。しかし、なかなか導入されない現状がある。これまでの唯一の実践例は、昭和女子大学附属昭和高等学校が Super Language High School の指定を受けて3年間の実践を行ったもののみである。この実践では、教科書本文の分量を半分程度に減らした「縮約版」を使い、input の時間、intake の時間、output の時間という3時間ローテーションで授業を進めた。対象となった生徒たちは、高校入学時には、中学校での学習項目が十分に身につけているとは言い難いレベルであったにもかかわらず、高校3年が終わる頃には、英語のみで進められる授業に抵抗を示すことなく、積極的に言語活動に取り組むようになった。しかし、実際に教

科書の内容がどの程度定着したか等を示す客観的なデータが十分にはそろわなかったため、「縮約版」を利用した授業の普及にはつながらなかった。

言語活動を多く取り入れた生徒中心型の授業が外国語学習を促進させるということ、多くの教師は理解しているが、実際に自分の授業を生徒中心型に変えようとすると、事は容易ではない。教材作成に時間がかかりすぎる、具体的な授業パターンを考えられない、同僚の理解が得られない、などの理由が行く手を阻んでいるからである。これらの諸問題を解決するために、「縮約版」を利用した授業を教育現場に導入しやすくするための基礎研究が必要とされている。

2. 研究の目的

本研究の目的は2つある。1つ目は教科書本文を間引いて縮約版を作成する際の基準と手順を整理し、縮約版の具体例と共に提示すること。2つ目は縮約版を利用した新たな授業モデルを提案することである。

3. 研究の方法

(1) 検定教科書分析

高等学校の検定教科書(「コミュニケーション英語」「コミュニケーション英語」)について、中学校までの既習文法事項が含まれるもの、高等学校で新たに導入される文法事項が含まれるものがどの程度あるか、それぞれの割合を算出し、縮約版を作成する際に間引くことができる英文の候補を示す。

(2) 縮約版の試作

(1)の分析結果をもとに、英文を間引いたり書き換えたりする作業を経て、実際に縮約版を作成し、その手順を整理する。

(3) 縮約版を用いた授業モデルの考案

縮約版を用いて実際にどのような授業を展開することができるのかをシミュレーションし、具体的な授業案を提案する。

4. 研究成果

(1) 教科書分析

縮約版作成の過程で間引く英文には、文章の概要把握には必ずしも必要ではない英文や、単語さえわかれば学習者が自力で理解できるものが候補として挙げられる。このような英文が、「コミュニケーション英語」の検定教科書本文の中にどの程度出てくるのかを調べるために、同一出版社から発行されている異なるレベルのコミュニケーション英語の教科書を複数冊取り上げ、本文をデジタル化した上で、構文分析を行った。分析対象としたのは、『CROWN』『MY WAY』『VISTA』(三省堂)、『PROMINENCE』『POWER ON』『ALL ABOARD』(東京書籍)、『ELEMENT』『LANDMARK』(啓林館)、『GENIUS』『COMPASS』(大修館)、『MAINSTREAM』『NEW STREAM』(増進堂)、『POLESTAR』『BIG DIPPER』(数研出版)、『UNICORN』『Grove』(文英堂)の16冊で、

各教科書のレッスン本文の中で、「中学校で学ぶ文法事項を含む英文」の割合と、「高等学校で新たに学ぶ文法事項（表1）を含む英文」の割合を算出した。

表1 . 高等学校で新たに学ぶ文法事項

不定詞	原形不定詞の用法
関係詞	先行詞をとらない関係代名詞 what
	非制限的用法
	関係副詞の用法
助動詞	助動詞の過去形
	助動詞を含む受け身表現
	助動詞と完了形を用いた過去に関する推測の表現
形式主語	it が名詞用法の節を指すもの
形式目的語	it が名詞用法の句及び節を指すもの
時制	現在完了進行形
	過去完了形
仮定法	仮定法
分詞	分詞構文

分析結果から、9割近くの英文が中学校までの既習文法事項を含んでおり、高等学校で新たに導入される文法事項を含んだ英文の割合は各レッスンおよそ1割程度であった。このことから、文構造の複雑さという観点からは、縮約版作成の過程で間引く英文の選定は、比較的容易に行えることがわかった。

同様の分析を、コミュニケーション英語の教科書についても行った。対象としたのは、『CROWN』『MY WAY』『VISTA』（三省堂）、『PROMINENCE』『POWER ON』『ALL ABOARD』（東京書籍）、『ELEMENT』『LANDMARK』（啓林館）、『GENIUS』『COMPASS』（大修館）、の10冊。コミュニケーション英語の場合と同様に、高等学校で新たに学ぶ文法事項が本文中にどの程度出現するかを分析した結果、やはり1割程度であった。

以上の分析結果を参考に、実際にコミュニケーション英語の教科書を用いて本文の縮約版を作成し、その難易度をオリジナルと比較した。参考までにコミュニケーション英語、それぞれの1課分の一例を示す。

表2 . Genius Communication English 1 Lesson 1

項目	オリジナル	縮約版
単語数	470	265
段落数	8	8
文数	38	22
1段落あたりの平均文数	4.7	2.7
1文あたりの平均語数	12.2	12.0
1語あたりの平均文字数	4.3	4.4
受動態の%	0%	0%

Flesch Reading Ease	71.5	69.1
Flesch Kincaid GL	6.3	6.6

表3 . CROWN Communication English 2 Lesson 2

項目	オリジナル	縮約版
単語数	737	421
段落数	22	14
文数	61	34
1段落あたりの平均文数	3.0	2.4
1文あたりの平均語数	11.9	12.3
1語あたりの平均文字数	4.4	4.4
受動態の%	4%	5%
Flesch Reading Ease	69.0	66.8
Flesch Kincaid GL	6.4	6.7

表2、3が示すように、縮約版はオリジナルと比較して総語数や文数がおおよそ半減する。一方、英文自体の難易度については、縮約版は原則としてオリジナルの英文を間引く形で作成するため、英文の書き換えはあまり行わない。そのため、段落数や1文あたりの平均語数、1語あたりの平均文字数などには大きな変化は見られない。

レベルの異なる教科書（中位レベル）でも同様の比較を行ったところ、似たような結果が得られた（表4、表5参照）。

表4 . COMPASS Communication English 1 Lesson 7

項目	オリジナル	縮約版
単語数	414	219
段落数	12	7
文数	40	21
1段落あたりの平均文数	4.0	3.0
1文あたりの平均語数	10.0	10.4
1語あたりの平均文字数	4.6	4.6
受動態の%	5%	4%
Flesch Reading Ease	71.2	69.9
Flesch Kincaid GL	5.8	6.0

表5 . MY WAY Communication English 2 Lesson 7

項目	オリジナル	縮約版
単語数	481	268
段落数	12	11
文数	44	25
1段落あたりの平均文数	3.6	2.2
1文あたりの平均語数	10.9	10.7
1語あたりの平均文字数	4.5	4.5
受動態の%	18%	20%
Flesch Reading Ease	72.2	70.3
Flesch Kincaid GL	5.8	6.1

(2) 縮約版作成の基準と手順の整理

縮約版を作成するための手順としてもっとも教師が頭を悩ませるのは、どの英文を間引くかということである。これについて、本研究でおよそ 20 冊のコミュニケーション英語の教科書を使って縮約版を作成した結果から、(a) 情報の繰り返しや重複が見られる英文、(b) 例示のための英文、(c) 読者への問いかけや呼びかけといった修辞疑問文的な英文の 3 種類を優先的に間引くと、縮約版を作成しやすいのではないかとということがわかった。例えば、(b) 例示のための英文については、例示が 1 つの場合は、それを間引いてしまうことで本文の内容を理解しにくくなってしまふことがあるが、例示が 2 つ以上示されている場合は、もっともわかりやすいものを 1 つ残して、後は間引くことができる。また、英文の長さがおおよそ 20 語を超えるものについては、分割したり、挿入句を省略するなどして適度な長さ書きかえることで、より使いやすい縮約版を作成することができる。

縮約版の作成は、回数を経るごとに容易になってくると考えられるので、授業を重ねるにつれて、縮約版作成にかかる時間の短縮も期待できる。

(3) 縮約版を用いた授業モデル

縮約版を用いた授業モデルを考える際、教科書と生徒の英語力のギャップがどの程度であるかによって、縮約版の活用方法が変わってくる。

教科書が生徒にとって難しい場合は、限られた授業時間の中で、オリジナルの本文をすべて定着させることは物理的に難しいため、縮約版を用いて「学習項目(分量)を絞り込む」ことで、授業を通して生徒が身に付ける英語の分量を少しでも増やすことを目指すのが現実的である。また、教科書本文の和訳を先に読ませて日本語で本文の概要を理解した上で、縮約版を活用して教科書本文の英語に注目させるという方法もある。このタイプの授業の流れの一例を表 6 に示す。各レッスンのパートごとに 1～5 の流れを繰り返して授業を進め、すべてのパートの学習が終わったところで 6 を行う。

表 6 . 授業の流れ (例 1)

- 1 . オリジナル本文の和訳を読む
- 2 . 縮約版を配布し、音声を聞きながら黙読
- 3 . 縮約版の内容理解 (英問英答)
- 4 . 縮約版の文法解説
- 5 . 縮約版の音読・暗唱・Retelling など
- 6 . オリジナル本文を読み、内容理解 (英問英答)

一方、教科書が生徒にとって易しい場合は、オリジナルの本文を読ませて、縮約版を生徒自身に作らせても良い。その上で、完成した

縮約版を使って音読等の定着のための活動を行う。コミュニケーション英語の教科書は 1 レッソンの本文の長さが中学校と比べて長いので、授業中に本文すべてを音読させるとなると、相当の時間がかかる。学んだ英語を定着させるためには、繰り返し音読等の活動を行うことが不可欠であることを考えると、縮約版のように分量を絞り込んだ教材を使った方が、結果として生徒が身に付ける英語の分量は増えると考えられる。このタイプの授業の流れの一例を表 7 に示す。もう 1 つの方法としては、縮約版を用いて教科書本文の内容をざっくり理解した上で、関連する別の読み物を読ませたり、発表活動やディスカッション等のプロダクション活動に授業時間を割くことが挙げられる。このようにすることで、「教科書の中身を教える」のではなく、「教科書をベースにして、英語を教える」ことに力点を置いた授業展開が可能になる。

表 7 . 授業の流れ (例 2)

- 1 . オリジナル本文の内容理解
- 2 . 縮約版の作成 (重要な情報が書かれた英文のみを抽出し、本文の分量をおおよそ半分程度にする。ディスカッション等を通して、クラスで 1 種類の縮約版を完成させる。)
- 3 . 完成した縮約版を使った英問英答問題を作成する。その後、ペアになってお互いが作成した問題を解く。
- 4 . 縮約版の文法解説について、どの文法事項を説明するか、どのように説明するかを考える。その後、ペアになってお互いの案をシェアする。
- 5 . 縮約版の音読・暗唱・Retelling など
- 6 . 関連するトピックの読み物を読む、発表活動やディスカッションなど

なお、教科書のトピックやジャンル、文章のスタイルによっては、縮約版を作成しにくいもの、あるいは縮約版を用いることが不適切なものもある。例えば、小説やショートストーリーが原典となっている教科書本文や、ダイアログ形式で書かれたものなどは、本文を間引くことで全体の流れが阻害されてしまう可能性が高いため、縮約版を作りにくい。このようなレッスンについては、無理して縮約版を用いる必要はない。縮約版を柔軟に活用することで、生徒の英語力を伸ばす授業展開を行っていく必要がある。

(4) 今後の課題

本研究を通して、縮約版作成にあたっては、オリジナルの教科書本文のトピック、ジャンル、文章のスタイルによって、縮約版を利用した授業展開の向き・不向きがあることがわかった。今後、縮約版を活用した授業の実現可能性をさらに探るために、これらの影響についても検証する必要がある。

さらに、本研究では、作成した縮約版を実

際に学習者に読んでもらう機会を作ることができなかったので、「読みやすさ」の実証研究が求められる。4. 結果成果の(1)でも述べたように、文構造の複雑さやReadabilityの数値による「読みやすさの指標」については、オリジナルの教科書本文と縮約版との間にはそれほど大きな差は見られなかった。これは縮約版作成の過程で、オリジナルの教科書本文にそれほど大きな修正(書き換え)を加えずに、全体の分量を半分程度に減らしたことによるものだが、果たして学習者にとって「分量が減る」ことで、文章の読みやすさが変わるのか、ひいてはそれが学習効果にどのように結びつくのかについて、さらなる検証が必要とされる。

<引用文献>

金谷憲, 高山芳樹, 臼倉美里, 大田悦子(2011). 『高校英語授業を変える! 訳読オンリーから抜け出す3つの授業モデル』アルク.

Swain, M. (1985). Communicative competence: Some roles of comprehensible input and comprehensible output in its development. In S. Gass & C.

Super English Language High School 研究開発実施報告書(平成17年度~19年度). 昭和女子大学附属昭和高等学校.

5. 主な発表論文等

(研究代表者, 研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

臼倉美里, 中学校から高等学校への橋渡し: 越えなければならない壁, 『英語教育』, 査読無, 第63巻第1号, 2014, 28-29

[学会発表](計10件)

臼倉美里, 日本語サマリーを利用したTwo-way Translation活動, 第15回Sherpa発表会, 2016年3月13日, 日出中学・高等学校, 東京都, 目黒区

臼倉美里, 日本語サマリーを利用したTwo-way Translation活動, 第14回Sherpa発表会, 2015年12月23日, 高槻中学・高等学校, 大阪府, 高槻市

臼倉美里, 日本語サマリーを利用したTwo-way Translation活動, 第13回Sherpa発表会, 2015年8月19日, 八口ー会議室千葉, 千葉県, 千葉市

臼倉美里, 日本語サマリーを利用したTwo-way Translation活動, 第5回Sherpa演習セミナー, 2015年3月1日, 日出中学・高等学校, 東京都, 目黒区

臼倉美里, 日本語サマリーを利用したTwo-way Translation活動, 第4回Sherpa演習セミナー, 2014年12月21日, 関東学院中学・高等学校, 神奈川県, 横浜市

臼倉美里, 日本語サマリーを利用した

Two-way Translation活動, 第3回Sherpa演習セミナー, 2014年10月19日, 福岡大学附属若葉高等学校, 福岡県, 福岡市

臼倉美里, 日本語サマリーを利用したTwo-way Translation活動, 第2回Sherpa演習セミナー, 2014年3月2日, 文京学院大学, 東京都, 文京区

臼倉美里, 日本語サマリーを利用したTwo-way Translation活動, 第12回Sherpa発表会, 2013年11月24日, 中央大学附属横浜中学・高等学校, 神奈川県, 横浜市

臼倉美里, 高校英語授業を変える3つの授業モデル, 共立女子第二中学・高等学校英語研究会, 2013年8月28日, 共立女子第二中学・高等学校, 東京都, 八王子市

臼倉美里, 日本語サマリーを利用したTwo-way Translation活動, 第11回Sherpa発表会, 2013年8月24日, 和洋国府台女子高等学校, 千葉県, 市川市

[図書](計1件)

金谷憲, 隅田朗彦, 大田悦子, 臼倉美里, 大修館書店, 高校英語教育を整理する! 教育現場における22のギャップ, 2014, 207

6. 研究組織

(1)研究代表者

臼倉 美里 (Usukura, Misato)

東京学芸大学・教育学部・講師

研究者番号: 00567084